**研究発表要旨**

**『鐘』における信仰・救済・道徳**

**野口　ゆり子**

　拙著『ロレンスとマードック――父性的知と母性的愛』(2004)で、筆者はロレンスとマードックを対峙させ、母の胸のなかから言葉の世界へと生み落とされる人間の宿命とも言える、知と愛の相克を考察し、そのなかでマードックの『哲学者の弟子』を取り上げた。この小説で、哲学者の死後、教会を離れ、ギリシアの地で一人暮らすバーナード師は「神はいない。キリストの美しさでさえ罠であり、嘘である」と手紙に書く。彼は「魅力のない神聖」を説くことが「未来の宗教」であり、それだけが「惑星を救える」のだと言う。この言葉はマードック文学を理解する上で重要な意味を持っていると思われる。

　マードックは「普通の人々は、宗教的であろうとなかろうと、大部分はまだ、ある価値が絶対的で、この意味において唯一であると信じている」と言っているが、バーナード師にとって、宗教は絶対的なものであり、価値あるものであった。彼にとって宗教は思考の台座であり、彼はそれを捨てることができない。そのようなバーナード師へのマードックの視線は、ウィドーズの言葉を借りれば、「神への信仰がない世界においてさえ、精神的な経験は尊重され、認められるべきである」と考える哲学者の視線である。

　バーナード師の精神的な経験は宗教のなかにあった。彼は宗教の絶対的価値を信じていたわけであるが、マードックもまた、あるものの絶対的価値を信じていた。それは「言葉」である。彼女には言わば、言葉への信仰があった。彼女は「言葉による救済」という論文のなかで、「言葉は我々が人間として、そして道徳的精神的行為者として生きる場所である」と述べている。彼女のこの言葉は、ハイデッガーの「言葉は、存在の家」であり、「言葉による住まいのうちに、人間は住む」を想起させる。しかし、彼女にとって言葉は単に人間の「存在の家」ではなく、そこに住むことによって道徳的存在になることができる「生きる場所」であった。また、「芸術が我々の生存と、我々の救済のために最も実際的で重要であり、それは文学であるということは疑いのないこと」だと考えるマードックにとって、小説は救済のための手段であった。

　「宗教の神話は様々な性質で現れる隠喩である」 と考えるマードックは、宗教的な作品を書くことで、哲学的問題を隠喩として小説のなかで描いたと考えられる。イーグルトンが言うように、神の死が意味しているものは、我々はもはや形而上学的基礎を必要としなくなったということであるのなら、自分のことをウィトゲンシュタイン主義者の新プラトン主義者だと言ったマードックにとって、それは受け入れがたいことだったはずである。

　マードックの初期の宗教的作品である『鐘』は、救いを求め、信仰に生きようとする人々と、彼らを惑わせる愛を描きながら、現代において善を探究することは可能であるか、そして、意志の自由とはどういうことであるかを読者に問いかける作品である。夫との関係に苦しみながら、恋人のもとへと逃げることしかできなかったドーラは、自分が罪を犯しているという自覚もなかった。しかし、インバーという修道院と俗界の狭間でさまざまな経験をすることで、彼女は夫への恐怖心を克服し、自分の将来を自ら選択する人間へと変わることができた。

　ドーラは道徳的に救済されたわけであるが、それは、フーコーが『性の歴史Ⅱ　快楽の活用』で考察したような、古代ギリシアで行われた自己統御、あるいは、キリスト教道徳で求められる自己放棄ではない救済のされ方であった。マードックは、アウグスティヌスの「知性的自己認識にまで自分をたかめ、思考を習慣からひきはなして、反対するさまざまな幻想の群れから身を遠ざける」という言葉や、ウィトゲンシュタインの「言葉にすることができないものは確かにある。それはそれ自身を明らかにする。それは神秘的なものである」という言葉を想起させる物語を通して、古代ギリシアのでも、また、キリスト教のでもない道徳的救済の仕方を示したのである。